

中国・ロールガイ高原の植物

札幌市 辻井達一

四川省は広い中国の中でももっとも奥地に所在すると言ってもよいだろう。もちろん、そのさらに西側には広大な西域の諸省すなわち青海省、西藏ならびに新疆自治区がありはするものの、古くからの漢民族の領域としてはやはりもっとも内陸に所在する。実際にその西はほとんどチベット高地すなわち現在青藏高原とよばれるものに接するのである。

四川省は、雲南省と並んで植物の宝庫とされる。雲南省が温暖な気候の下で多くの植物に恵まれるのに対して、四川省はむしろ寒冷な条件での種類に特色がある。

もっとも、四川省の中央部をなす四川盆地は温暖をもって知られるところで、暖地の植物がよく育つ。省都成都は水田の中央部にあり、竹がよく伸びるのがみられる。

しかし、その西北部は急速に標高を増して青藏高原に連なり、6000メートル級の山岳にめぐらされるのである。

この地方に中国最大の湿原があり、その規模は山地の湿原としてはむしろ世界最大級と考えられるので、一度、踏査してみたいものとかねがね考えていた。1988年の夏に、以前から親交のあった長春の東北師範大学地理系の柴教授の斡旋を得て、同教授の研究室との共同調査が可能となったのである。

道は成都から北上してまず灌県に達する。ここは長江（揚子江）の一支流、民江

が中国でもっとも古い分流ダム都江堰によって分けられるところである。支流といってもこのあたりでなお200メートル余があり、堰を対岸まで渡る釣り橋を渡りきるにはなかなかの勇気が要る。

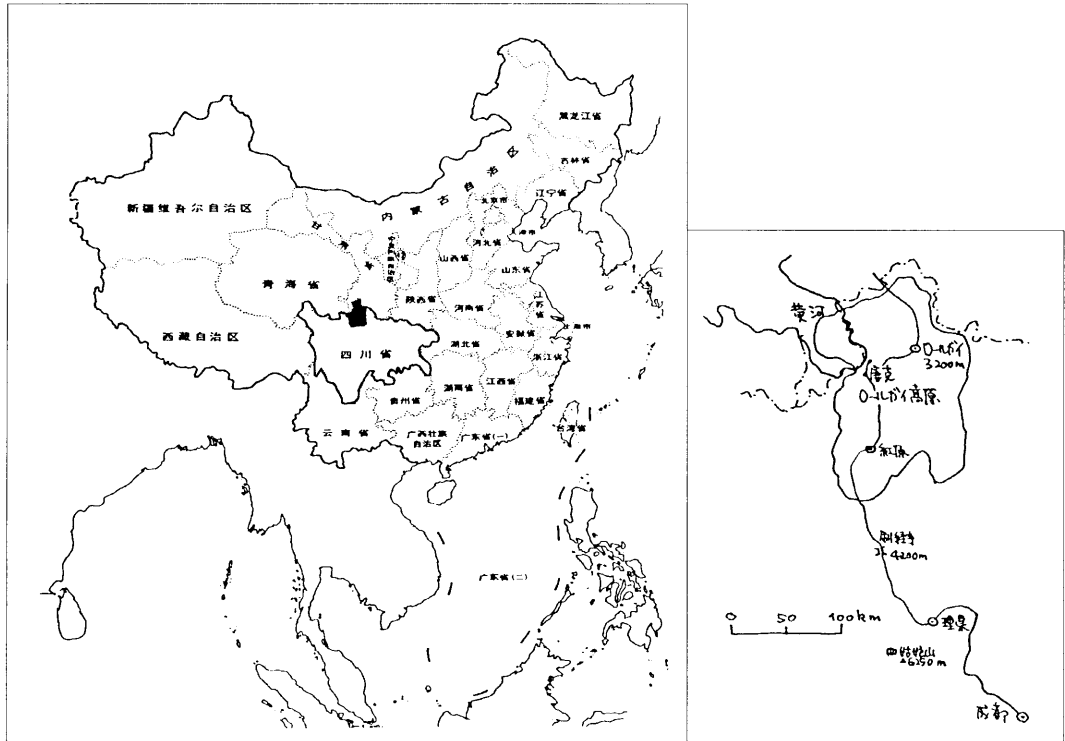
民江に沿って進み、途中からさらにその支流を遡って理県で一泊、翌朝早く出発して谷底の道を這うようにして標高を稼ぐ。

兩岸共に急斜面で激流に落ち込んでいて斜面上部に散見される建物はいつのまにかほとんどが平屋根、石積みの蔵（チベット）族のものに代わっている。

針葉樹が増してきて、気温が低くなったな、と感じたあたりが川との分かれで、ここからは急斜面を九十九折れに上がって、遂にこのルートの最高点4200メートルの刷経寺の峠に立った。この時にはまだ、それほどとも思わなかったが、やはり軽い高山病にやられて2日ほど頭が痛かった。

峠を高原に向かって下りると、ツガやモミの森林がかえって減少する。標高が低くなるのだから少々、妙な気がするのであるが、これは峠付近が気候の分かれ目になっているためで、実際、そのあたりではほとんど常に霧が巻いている。ここから北西にかけては次第に乾燥した気候の支配するチベット高原に入るのである。

高原に入って最初の町は紅原である。この名は、毛沢東率いる中国紅軍が、いわゆる長征の途次、通過したことから名付けら



れたという。この頃のことは朱徳將軍から取材したアグネス・スメドレーの『偉大なる道』に詳しい。(しかし、スメドレーの記述は朱徳からの取材というだけにやはり紅軍に傾いていることは否めないようだ。当時、この高原を通過するにあたって、紅軍は、しないでいいはずの苦勞をして湿原の中を通過している。周辺からのチベット族の襲撃が甚だしかったためで、紅軍は決して歓迎されたのではなかった。)

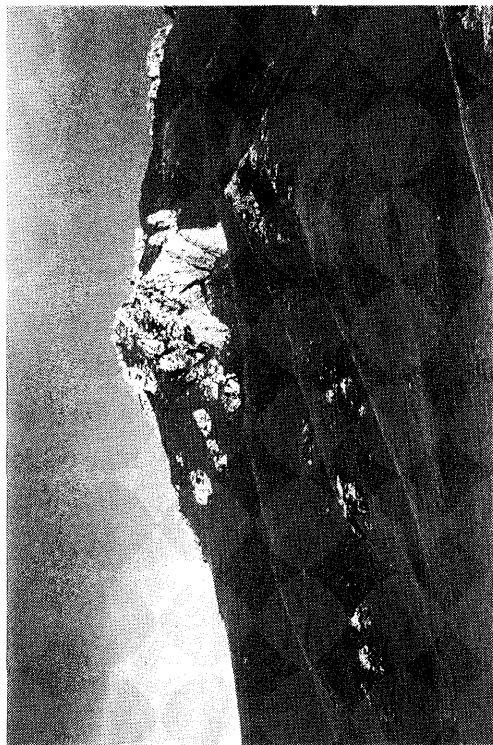
さて、紅原では、ここに置かれている草原研究所で標本を見せてもらったり、スタッフの助力を得て、近隣の調査を行ったりした。このあたりでは泥炭を掘り上げて燃料に使っている。

紅原を過ぎ唐克に至って、初めて黄河を見た。そのもっとも接近する索格藏寺で、

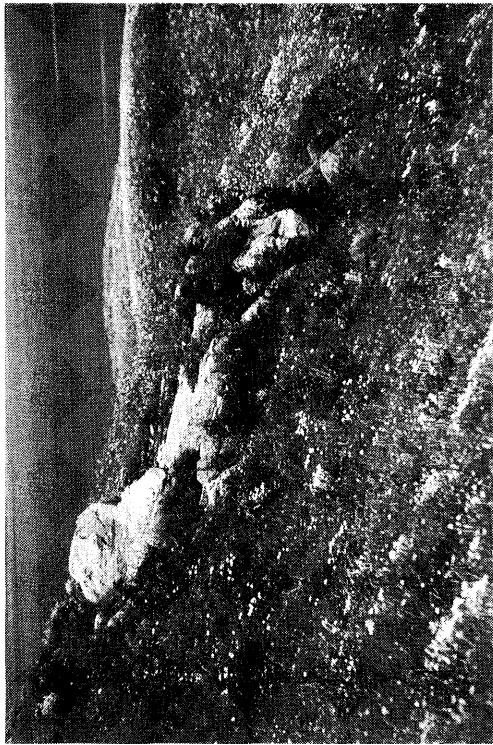
低い丘を幾つか越えて黄河の岸边に立ってみた。名のほどには水は黄色ではない。実は、黄河はここではまだ泥を含んではいなくて、ここから一旦、大きく北西に曲がり甘肅省から内蒙古の黄土地帯を通過する時に黄色に染めあげられるのである。

道はここからいよいよ最大の湿原地帯の中央部を横断することになる。唐克から若爾蓋(ロールガイ)までのほぼ100キロであるが、ただ一望の平坦な湿原というのではなくて、幾つかのゆるやかな起伏に不規則に区切られた湿原の連続である。

起伏は比高およそ150メートルから200メートル程度の丘陵状のなだらかな山地で、まったく樹木を欠き、丈の低い草本で被われており、遠目には芝生でカバーされているように見える。



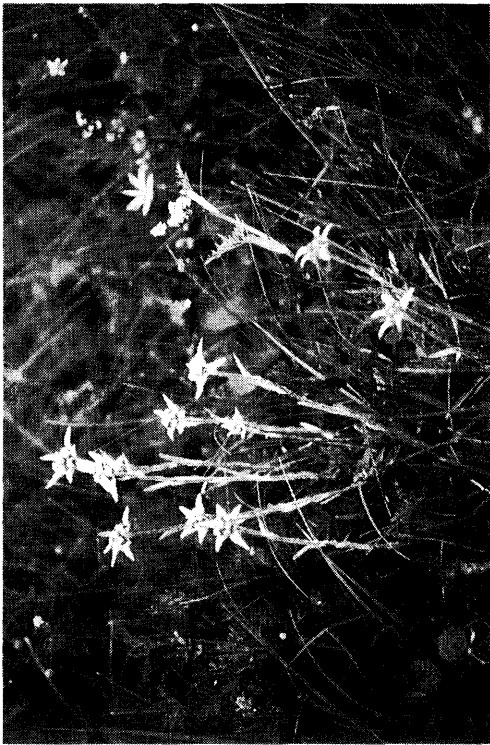
石灰岩の露頭のある丘陵。樹木は全くない。標高3500m



山腹斜面のお花畑



丘陵下部の放牧。手前は湿原



Leontopodium palustre

一旦、目的地ロールガイに根拠地を置いた私たちは、道をやや引き返してロールガイからおよそ20キロほど離れた小さな丘陵の麓にキャンプを設定した。この丘は、先に述べた起伏の典型的なものの一つで、草原が盛り上がった、というような感じがする。実際、丘の植物組成は草原そのものであった。

すなわち、そのもっとも低くて湿原に接しようとする部分は、草甸と呼ばれてやや草丈の長い草本すなわち *Deyeuxia* (イネ科) の類などが多く現れる。丘に登るにしたがっていわゆる高山植物が次ぎつぎに現れ、お花畑の様相を呈する。たとえば *Aster alpinus*, *Oxytropis ochrocephala*, *Gentiana subwilsonii*, *G. crassicaulis*, *Aconitum brachypodium*, *Saussurea kunchiana*, *Pedicularis longiracemosa*, *P. longiflora*, *Thalictrum smithii*, *Hedysarum sikkimense*, *Epilobium palustre*, *Spiraea alpina* などが咲き乱れている。そして、しばしばイブキトラノオに似た *Polygonum sphaerostachyum* の大きな群落が広がっている。

このあたりの山には、そのほとんどに大小の石灰岩の露頭があり、*Leontopodium palustre*, *Anaphalis hancockii* などが現れるのが特徴的である。また、中国名を狼毒というジンチョウゲ科の *Stellera chamaejasme* も目を引く存在であった。

つまり、それは尾瀬の至仏山、早池峰山、北海道なら岨山あるいは太平山などの例に近い、いわゆる超塩基性岩植生なのである。もっと大きな露頭は、この高原のもっとも

北に近いあたりで草原を囲む山々でも見られた。

こうして草原と湿原とに介在し、あるいは周囲を取り囲むように連なる山々が塩基性の基岩を持つならば、その斜面から流れこむ水が、それらを溶かしこんでいるのは当然である。そこで、この世界最大の高山湿原は、通常の泥炭地にみられるよりもはるかに酸性度が低く保たれる。むしろ、酸性であるというよりもアルカリ性であるというほうが近い。

そこで、湿原の植生を改めて調べてみると、確かにその傾向が出ていて、まず、酸性の条件に強いミズゴケ *Sphagnum* が全く現れない。そして、湿原の中ですらウスユキソウ属、ヤハズハハコ類が生育し、シバナの仲間 *Triglochin maritimum*, *T. palustre* もみられるのであった。

湿原の主役は *Kobresia* 属 (*K. tibetica*, *K. pygmaea*) と、中国では苔草と書くスゲ属 (*Carex enervis*, *C. moorcroftii*, *C. lasiocarpa*, *C. meyeriana*, *C. muliensis* など) およびイの類である。

これらの加えて湿原を彩るのはここでもやはり *Potentilla* 属、*Ranunculus* 属などが多かったが、湿原の縁に近いところや、流れに沿ってはキク科の *Cremanthodium* 属の幾つかが目立つ存在であった。

この湿原についての植物生態学的研究は先にその一部が家畜(主としてヤクとヒツジ)の放牧との関連においてまとめられて発表された。湿原そのものについては水位の変動量などのデータとともに近々、報告



Anaphalis hancockii



Stellera chamaejasme



Pedicularis longiflora



Cremanthodium plantagineume

されることになろう。

ロールガイ高原は、湿原としては中国最大だが、その放牧利用は古くからチベット系住民によって行われていて、自然植生には乏しい。各所に放牧の影響が強度に表れており、現在みられるのは半自然の二次的植生である。

その意味では先に挙げた丘陵地の高山お花畑もまた、放牧によって維持されている、あるいは放牧に耐えて生き残った植物による一種のアルプ植生であるということができる。